

## 思春期の子育て不安尺度の作成

宮脇 克実\*1

山本 真由美\*2

### Construction of the Mother's Childcare Anxiety Scale in Adolescence

Katsumi MIYAWAKI

Mayumi YAMAMOTO

Department of Psychology, The University of Tokushima

#### Abstract

This study attempted to construct mother's childcare anxiety scale in adolescence. In order to construct the scale we administered it to the mothers. Exploratory factor analysis found three main factors within a total of 28 items. Factor 1 was named "anxiety of child's relationship with friends and the uneasiness of mothers to cope with child's behavior"; factor 2 was named "mother's anxiety about the support from her husband and from the people around"; factor 3 was named "anxiety for child's school life and his behavior". The means of each factor are 2.59, 2.37, and 2.65. These results suggested that mother's childcare anxiety was not so high, but existed some peculiar anxiety about children in adolescence.

key words : adolescence, childcare anxiety, mother

---

\*1 徳島大学大学院人間・自然環境研究科臨床心理相談室 Clinical Psychology Counseling Service at Graduate School of Human and Nature Environment Science, The University of Tokushima

\*2 徳島大学総合科学部 Faculty of Integrated Arts and Science, The University of Tokushima

## はじめに

「子育て」という言葉は、乳幼児期の子どもの養育をイメージさせる。しかし、子育ては乳幼児期に限定されるものではない。武内（2004）が、「子育てとは、子どもを守り・育み・自立へと向かわせる、胎児期から青年期まで続く（あるいは子どもが大人になっても続く）長期にわたる営み」としているように、子どもが学童期や思春期に至っても子育ては続いていく。

武内は（2004）は、「日本の母親の多くが『子育ては楽しみや生きがい』であると肯定的に感じていると同時に、半数以上が『子育てはつらく苦勞が多い』と否定的にも感じているという実態が明らかになっている」と述べている。長坂（2002）は育児不安と関連する要因として、社会的な背景（核家族化、地縁（近隣関係）の希薄化、兄弟姉妹がいない、少子化が進んで周りに子どもがいない、生育の過程で子どもに接する機会がない、住宅環境の問題により母親は孤立し不安が深刻化していく、など）、夫をはじめとした家族の支援、母親側の要因（望まない妊娠による出産、母親が精神的・身体的に不安定な状態にある、経済的な問題、育児に対する知識・子どもの扱い方などが不十分であることから出てくる不安、など）、子ども側の要因（障害を持って生まれた子ども、低出生体重で生まれた子ども、育てにくい子ども、などは母親の不安を高じさせ虐待に移行していく場合がある、など）の4つをあげている。

ところで、「子育て不安」についての先行研究には、乳幼児期の子育て不安、いわゆる育児不安に関するものは多いが、それ以降の子育て不安に関する研究はほとんどない。子どもへの対応法などを記した図書がある程度である。Coleman, J. C. ら（1999/2003）は、乳幼児期の子の親には子育てに関する情報が多い一方で、学童期や思春期の子どもを育てる親への支援に関する情報が少ないことを指摘している。

「人の子どもは、ほかの哺乳動物に比べ未熟な状態で生まれてくるといわれている。…中略…一人で移動できるようになる一歳前後まで、親が身近にいて運搬し、授乳や離乳食を与えつづけなくてはならない」（榊原，2004）ことから、乳幼児期の子育ては学童期や思春期の子どもに比べて子どもに手がかかることが多く、直接に子どもと接する時間が長いので子育て不安を感じることも多いかもしれない。また、乳幼児期の育児不安の材料は、ミルクを飲まない、離乳食が進まないなどの栄養に関するもの、まだハイハイしない、寝返りをしないなどの発達に関するもの、体重増加や身長の伸びがはかばかしくないなどの成長に関するもの、このようにいろいろある（榊原，2004）。このような不安材料は乳幼児期にほぼ限られたものであり、これらの不安材料がほとんどなくなる学童期や思春期の子育ては、乳幼児期の子育てに比べて不安は減るかもしれない。しかし、そのことは学童期や思春期の子どもが子育てに不安を抱いていないということにはならず、学童期や思春期の子どもが親に対する支援やその情報が不必要であるということの意味するものではないであろう。乳幼児期と学童期や思春期では子育て不安の質の変化が起こるのではないだろうか。そこで、本研究では、思春期の子どもをもつ母親の子育て不安に焦点をあてる。

思春期とは、まさに子どもから大人に成熟していく過渡期にあたり、身体的・精神的・社会的に著しい成長をとげる激動の時期でもある。この時期の子どもは、それまで保って

いた心身のバランスを崩しやすく、思春期のさまざまな問題を表すところとなる（最上，2005）。子どもは、親や教師など周囲の大人に頼らず、何事も自分の力で決定しようとする傾向が強まり、大人からの介入や干渉に強い拒絶を示し距離をおくようになる（沼山，2004）。子ども自身の行動範囲が拡大し、仲間関係の変化や、情報、物、金銭の活発な出入りもみられるようになるため、それまで通用していた親子関係のルールをそのまま用いようとする親と、これを打破しようとする子どもの間にはしばしば衝突も起こる（加藤，2004）。

また、近年、人間を取り巻く社会環境は急激に変化している。インターネット、衛星通信などの普及により、世界中の情報が瞬時に簡単に手に入るようになった。携帯電話では、不特定の人と話したり、メールをしたりできるようになっている。そのような状況下において、メディアと人間行動との関係性は、一方向的ではなく双方向的であると考えられている（小澤・富家，2004）。例えば、ニュースやドラマの暴力シーンを見て、それを現実場面で模倣したり、アルコール飲料や煙草のCMや新聞雑誌広告にある光景を見て、飲酒、煙草をはじめたりするようになるというようなものである。相手構わず流出する膨大なメディア情報に対して、現代の人間は無策である。様々なメディア情報には、有益なものと同様に有害なものも含まれている。ここで必要なのが、それらの情報を正しく取捨選択できる能力である。現在のところ、そのような教育が十分行なわれているとはいえない。そこで、良きにつけ悪きにつけ、この影響を大きく受けているのが、子ども世代であろう。その中で、発達的に自立への道を歩みはじめる思春期の子どもの行動の統制は一番難しいといえる。

思春期の子どもの発達特徴や社会環境から考えて、思春期の子どもの親は、①他人の子と比較することによる不安、②学校への適応という不安、③友人関係の不安、④親子関係の不安、⑤性に関する不安、⑥将来への不安、⑦現在の子への不安、⑧家族からのサポートに関する不安、などといった不安を思春期にある我が子に抱くのではないかと考える。つまり、思春期の子どもの親だからこそ抱く子育て不安があるのではないだろうか。しかし、思春期の子ども自身の心理特性などについての研究は数多くみられるが、思春期の子どもをもつ親の心理特性などについての研究は少なく、思春期の子どもの親の子育て不安を測定する尺度はないといえる。

そこで本研究では、思春期の子ども母親における子育て不安はどのようなものであるのかを明らかにするために、思春期の子どもを対象とした子育て不安尺度を作成することを目的とする。今日、父親の子育て参加が大切とされているが、やはりその大半は母親が担っているという現状がある。そこで、まず、子育て不安を考える上で母親を対象として考えることにする。

## 予備調査尺度項目の収集

### 目的

思春期（中学生）の子どもを育てる母親の子育て不安（以下、子育て不安とする）についての項目を自由記述により収集し、質問項目を作成することが目的である。

### 方法

- (1) 被調査対象者 A 大学大学院臨床心理学専攻の女性 23 名。
- (2) 調査内容 無籐ら（2004）を参考に筆者らが考えた思春期の子どもを育てる母親が抱くと考えられる不安についての分類は、①自分の子どもを他人の子どもと比較することによる不安、②学校への適応という不安、③友人関係の不安④親子関係の不安、⑤性に関する不安、⑥子どもの将来への不安、⑦現在の子どもに対する不安、⑧家族からのサポートに対する不安、⑨その他の不安、以上 9 分類とした。
- (3) 調査時期 200X 年 4 月下旬に実施。
- (4) 調査手続き 質問紙を配布し、翌日の別の授業時に回収した。回収された質問紙から得られた回答を、項目ごとに大学院生 3 名により KJ 法によって分類した。

### 結果

質問紙の配布数は 23 部、回収数は 17 部（回収率 73.9%）であった。質問紙全体で 260 の回答を得た。次に、それぞれ項目ごとの回答を KJ 法によって分類し、51 のグループになった。なお、分類⑨の回答については、分類①～⑧のグループに分類できるかどうか検討を行なった。それぞれのグループの中から代表的な回答を 1～2 項目選択し、それらについて、表現等を検討し、最終的に 8 概念領域より構成される 48 項目の子育て不安予備調査尺度を作成した。

この尺度の概念領域は、①自分の子どもを他人の子どもと比較することによる不安（「他の子どもに比べて、性格に偏りがあるのではないか」、「他の家庭に比べて、親子のコミュニケーションが少ないのではないだろうか」、など）、②学校への適応という不安（「子どもと先生との関係はどうだろうか」、「子どもは勉強についていけているのだろうか」、など）、③友人関係の不安（「子どもはいじめられたり、いじめたりしていないのだろうか」、「子どもには本当に仲の良い友達がいるのだろうか」、など）、④親子関係の不安（「母親として子どもの発達に適した接し方ができているのだろうか」、「子どもと夫（父親）の関係がうまくいっていないのではないのだろうか」、など）、⑤性に関する不安（「子どもが妊娠をした、させたというようなことにならないのだろうか」、「子どもの第二次性徴に、どのように対応したらよいのだろうか」、など）、⑥子どもの将来への不安（「進路について親の希望と子どもの希望が一致しないのではないだろうか」、「子どもは進学できるのだろうか」、など）、⑦現在の子どもに対する不安（「子どもが非行にはしるのではないだろうか」、「いろいろな問題を子どもは親に相談せずに隠して、自分（母親）は知らないのではないだろうか」、など）、⑧家族からのサポートに対する不安（「自分（母親）が仕事などをした時、夫が子育てに協力してくれるのだろうか」、「子育てに対して周囲の人（夫以外の人）の理解やサポートがないのではないだろうか」、など）とした。

## 子育て不安尺度予備調査の実施

### 目的

予備調査尺度項目の収集により作成した子育て不安予備調査尺度の因子分析を実施し、より精度の高い子育て不安予備調査尺度を作成することを目的とする。

### 方法

- (1) 被調査対象者 中学生以上の子どもを育てる母親(中学生の子どもを育てた経験をもつ母親を含む) 65名。
- (2) 調査内容 先に作成した子育て不安予備調査尺度 48項目を実施した。回答形式はリッカートの5件法を用い、どの程度不安に思うかを、“全く不安でない(1点)”, “あまり不安でない(2点)”, “どちらともいえない(3点)”, “やや不安である(4点)”, “非常に不安である(5点)”で評定を求めた。得点が高いほど子育て不安が高いことを示す。
- (3) 調査時期 200X年8~9月に実施。
- (4) 調査手続き 中学生以上の子どもを育てる母親に対し、筆者ら、または知人を介して配布し、後日回収を行なった。

### 結果

配布数は65部、回収数は62部(回収率95.4%)、このうち無効回答数の多かったデータを除いたので、有効回答数は59部(90.8%)であった。

子育て不安予備調査尺度48項目を実施し、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行なった。項目は、いずれかの因子に.40以上の因子負荷があり、1因子について4項目以上を有するものを採用した。その結果、残った34項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行なったところ、4因子、34項目となった。回転後の負荷量平方和は、第1因子から順に、10.356、8.037、7.175、8.748であった。

第1因子は、“友達はどのような子どもだろうか”や、“男の子の性についてどのように対応したらよいのだろうか”などの13項目に因子負荷が高いことから、“友達関係と子どもへの対応についての不安”と命名した。

第2因子は、“子どもは勉強についていけているだろうか”や、“子どもと先生との関係はどうだろうか”などの6項目に因子負荷が高いことから、“学校生活と子どもの人間関係についての不安”と命名した。

第3因子は、“子育てに対して夫の理解やサポートがないのではないだろうか”などの7項目に因子負荷が高いことから、“夫と周りの人からのサポートについての不安”と命名した。

第4因子は、“家庭内暴力が起きるのではないだろうか”や、“他の家庭に比べて、親子のコミュニケーションが少ないのではないだろうか”などの8項目に因子負荷が高いことから、“子どもの行動とコミュニケーションについての不安”と命名した。

KMOによる妥当性は.776なので、この因子分析は妥当性があると考えられる。

負荷の高い項目によってそれぞれの因子の下位尺度を構成した。下位尺度の内的一貫性を検討するためにCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、“友達関係と子どもへの対応につ

いての不安”で.930, “学校生活と子どもの人間関係についての不安”で.872, “夫と周りの人からのサポートについての不安”で.894, “子どもの行動とコミュニケーションについての不安”で.872, 全体 34 項目で.948 であり, それぞれの因子, および全体に高い値を得, 統計的に有意義といえる. したがって, この 34 項目を子育て不安尺度として本調査で用いることとした.

## 子育て不安尺度の信頼性の検討

### 目的

作成した子育て不安尺度 34 項目を実施し, 因子分析により項目を整理し, 子育て不安尺度の信頼性の検討を行なうことを目的とする.

### 方法

(1) 被調査対象者 中学校 2 年生の母親 203 名 (B 中学校).

(2) 調査内容

1) 子育て不安尺度 先に作成した子育て不安尺度 34 項目について, リッカートの 5 件法を用い, どの程度不安に思いかを, “全く不安でない (1 点)”, “あまり不安でない (2 点)”, “どちらともいえない (3 点)”, “やや不安である (4 点)”, “非常に不安である (5 点)” の 5 件法で評定を求めた. 得点が高いほど子育て不安が高いことを示す.

なお, 項目に表記していた「親」は, 被調査対象校と協議の上, 「保護者」に変更した.

2) 特性不安尺度 STAI の特性不安尺度 20 項目について, ふだん一般にどの程度の状態であるかを, “ほとんどない (1 点)”, “ときたま (2 点)”, “しばしば (3 点)”, “しょっちゅう (4 点)” の 4 件法で評定を求めた. 得点が高いほど特性不安が高いことを示す. この得点を合計して “特性不安得点” とする.

3) フェイスシート 年齢, 子どもの性別, 子どもの数についての記入を求めた.

(3) 調査時期 200X 年 10 月上旬に実施.

(4) 調査手続き 生徒に対して授業時間中に配布し, 簡単な説明を行い, 母親に回答してもらいたい旨を伝えた. 回収は 1 週間後の授業内で行なった.

### 結果および考察

質問紙の配布数は 195 部, 回収数は 81 部 (回収率 41.5%), このうち無効回答数の多かったデータを除いたため, 有効回答数は 76 部 (39.0%) であった. 今回の調査における回答者の属性を Table 1 に示す.

子育て不安尺度 34 項目に対し, 主因子法・プロマックス回転による因子分析を行なった. 予備調査では 4 因子を抽出していたのだが, 固有値を算出したところ, 順に 13.08, 2.78, 2.30, 1.70, 1.50…となっており, 第 4 因子以降で固有値の差が小さくなっていたため, 固有値大きさと解釈の可能性から 3 因子解を採用した. 項目の選択にあたっては, いずれかの因子に.40 以上の因子負荷があり, それ以外の因子には.40 以上の負荷がないという基準により, それらの基準に該当しない項目を削除した. 残った項目について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い, 最終的に 3 因子 28 項目となった. Table 2

に示すとおりである。回転後の負荷量平方和は、第1因子から順に、9.012, 7.290, 7.473であった。

Table 1 質問紙調査回答者の属性

		度数	パーセント
年齢	29歳以下	0	0
	30～39歳	24	31.6
	40～49歳	49	64.5
	50～59歳	3	3.9
子どもの性別	男	28	36.8
	女	48	63.2
子どもの数	1人	8	10.5
	2人	35	46.1
	3人	29	38.2
	4人以上	4	5.3

第1因子は、“子どもの友達との関係はどうだろうかということ”や、“保護者として子どもの発達に適した接し方ができているのだろうかということ”などの12項目に因子負荷が高いことから、“友達関係と子どもへの対応についての不安”と命名した。

第2因子は、“自分が仕事などをした時、夫が子育てに協力してくれるのだろうかということ”などの7項目に因子負荷が高いことから、“夫と周りの人からのサポートについての不安”と命名した。

第3因子は、“子どもはまじめに授業をうけているのだろうかということ”や、“子どもが妊娠をした、させたというようなことにならないのだろうかということ”などの9項目に因子負荷が高いことから、“学校生活と子どもの行動についての不安”と命名した。

予備調査の結果とは異なり、3因子を抽出したが、第1因子には予備調査における“友達関係と子どもへの対応についての不安”因子がほぼ対応し、第2因子には予備調査における“夫と周りの人からのサポートについての不安”因子がほぼ対応し、第3因子には予備調査における“学校生活と子どもの人間関係についての不安”因子がほぼ対応していた。予備調査における“子どもの行動とコミュニケーションについての不安”因子は、子どもの行動に関すると思われる項目が第3因子に、子どもとのコミュニケーションに関すると思われる項目が第1因子に含まれた。

なお、この3因子による因子間相関は、Table 3に示すとおりである。

KMOによる妥当性は.787なので、この因子分析は妥当性があると考えられる。

Table 2 子育て不安尺度の平均値(標準偏差)と因子パターン行列

項目	$\bar{X}$ (SD)	F1	F2	F3
<b>第1因子 友達関係と子どもへの対応についての不安</b>				
A06 子どもの友達との関係はどうだろうかということ	2.75 ( 1.05 )	.934		
A10 子どもはいじめられたり、いじめたりしていないのだろうかということ	2.59 ( 1.12 )	.814		
A01 子どもには本当に仲の良い友達がいるのだろうかということ	2.50 ( 1.04 )	.737		
A15 他の家庭に比べて、親子のコミュニケーションが少ないのではないだろうかということ	2.33 ( 1.00 )	.715		
A12 いろんな問題を子どもは相談せずに隠して、自分は知らないのではないだろうかということ	2.95 ( .94 )	.703		
A13 保護者として子どもの発達に適した接し方ができているのだろうかということ	3.03 ( 1.11 )	.672		
A09 子どもが浮いた存在になっていないだろうかということ	2.50 ( 1.03 )	.664		
A02 自分は子どものために時間をあまり割いていないのではないだろうかということ	2.76 ( 1.03 )	.656		
A17 子どもが不登校になるのではないだろうかということ	2.16 ( .99 )	.575		
A24 子どもの友達はどのような子だろうかということ	2.45 ( .89 )	.540		
A14 他の子どもに比べて、性格に偏りがあるのではないかとということ	2.55 ( 1.04 )	.524		
A18 子どもは自分のことをどう思っているのだろうかということ	2.54 ( .94 )	.424		
<b>第2因子 夫と周りの人からのサポートについての不安</b>				
A27 自分が仕事などをした時、夫が子育てに協力してくれるのだろうかということ	2.46 ( 1.07 )		.876	
A11 子育てに対して夫の理解やサポートがないのではないだろうかということ	2.27 ( 1.05 )		.852	
A25 夫と子育ての方針で意見がくい違うのではないだろうかということ	2.40 ( .95 )		.731	
A21 子どもと夫(父親)の関係がうまくいっていないのではないのだろうかということ	2.19 ( .82 )		.706	
A05 夫と相談する時間がなく、夫の子どもへの理解が少ないのではないだろうかということ	2.39 ( 1.12 )		.647	
A29 子育てに対して周囲の人(夫以外の人)の理解やサポートがないのではないだろうかということ	2.43 ( 1.04 )		.612	
A23 子どもの第二次性徴 <sup>*</sup> に、どのように対応したらよいのだろうかということ	2.42 ( .97 )		.429	
<b>第3因子 学校生活と子どもの行動についての不安</b>				
A04 子どもはまじめに授業をうけているのだろうかということ	2.73 ( 1.30 )			.838
A26 子どもは勉強についていけているのだろうかということ	3.23 ( 1.20 )			.723
A22 進路について保護者の希望と子どもの希望が一致しないのではないだろうかということ	2.49 ( 1.06 )			.716
A16 子どもは生活習慣(挨拶、遅刻をしないなど)を守れているだろうかということ	2.54 ( 1.10 )			.689
A07 子どもは進学できるのだろうかということ	2.97 ( 1.30 )			.574
A20 子どもが妊娠をした、させたとようなことにならないのだろうかということ	2.30 ( .97 )			.556
A30 子どもと先生との関係はどうだろうかということ	2.63 ( 1.13 )			.539
A31 子どもが何を考えているのか分からないので、どうすればいいのだろうかということ	2.67 ( .99 )			.460
A34 子どもが非行にはしるのではないだろうかということ	2.30 ( .94 )			.408
<b>削除項目</b>				
A03 子どもは間違った性の知識を身につけていないのだろうかということ				
A08 子どもによる家庭内暴力が起きるのではないだろうかということ				
A19 子どもが事故や事件にあったり、病気になったりしないだろうかということ				
A28 子どもの反抗的な態度に、どう接すればよいのだろうかということ				
A32 子どもの異性関係はどのようなものであろうかということ				
A33 異性の子の性についてどのように対応したらよいのだろうかということ				



Table 3 子育て不安尺度因子相関行列

因子	F1	F2	F3
F1	1	.502	.594
F2		1	.481
F3			1

負荷の高い項目によってそれぞれの因子の下位尺度を構成した。下位尺度の内的一貫性を検討するために Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、“友達関係と子どもへの対応についての不安”で.916, “夫と周りの人からのサポートについての不安”で.895, “学校生活と子どもの行動についての不安”で.877, 全体 28 項目で.940 であり, それぞれの因子, および全体に高い値を得た。よって, 本尺度の信頼性は十分にあるといえる。

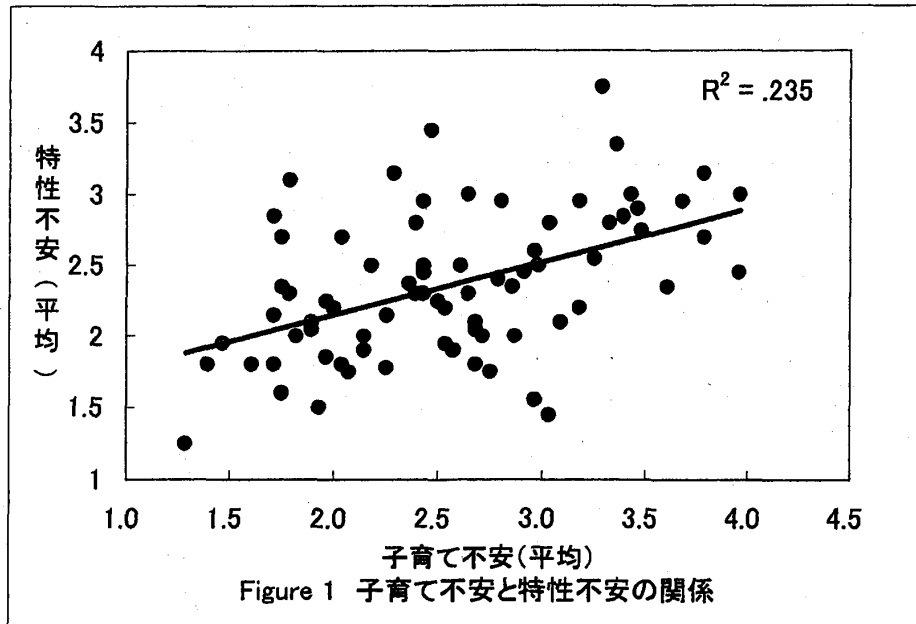
各項目の平均値, および標準偏差を Table 2 に記す。下位尺度の平均および標準偏差は, “友達関係と子どもへの対応についての不安”で平均値 2.59, 標準偏差.248, “夫と周りの人からのサポートについての不安”で平均値 2.37, 標準偏差.099, “学校生活と子どもの行動についての不安”で平均値 2.65, 標準偏差.300 であった。尺度全体の平均値は 2.55, 標準偏差は.259 であった。項目ごとでみると, 最高点は「子どもは勉強についていけているのだろうかということ」の 3.23 であり, ついで「保護者として子どもの発達に適した接し方ができているのだろうかということ」の 3.03 であった。思春期は義務教育が終わりに向かう時期でもあり, 親としては進学を控え我が子が勉強についていけているかどうか, 不安に思うのではないだろうか。また, 思春期は, 先に述べたように, まさに子どもから大人に成熟していく過渡期にあたり, 身体的・精神的・社会的に著しい成長をとげる激動の時期でもある。そのような時期の子どもに対し, 自分自身がうまく子どもに接することができているかどうか, 不安を抱くのであろうと考えられる。最低点は「子どもが不登校になるのではないだろうか」の 2.16 であり, 次いで「子どもと夫(父親)の関係がうまくいっていないのではないのだろうかということ」の 2.19 であった。不登校児童生徒の割合は年々増加しており, 小学生に比べ中学生に多くみられることから, 不登校に対する不安は思春期特有のものといえるのではないだろうか。しかしながら, 我が子が不登校になるのではないかとほのかなか思わないのではないだろうか。このように, 思春期の子どもをもつ母親の不安は高いとはいえないが, 思春期特有の子育て不安があることが明らかとなった。

さらに, 回答者の属性により子育て不安に差があるかどうかの検討を行なった。年齢による差 (F1:  $F(2,73)=1.367$ , n.s., F2:  $F(2,67)=1.640$ , n.s., F3:  $F(2,73)=2.753$ , n.s.) と子どもの性別による差 (F1:  $t(74)=.860$ , n.s., F2:  $t(68)=.129$ , n.s., F3:  $t(74)=.625$ , n.s.) はみられなかった。子どもの数による差で, “学校生活と子どもの行動についての不安” 因子のみで有意な差がみられた (F1:  $F(3,72)=1.902$ , n.s., F2:  $F(3,66)=1.701$ , n.s., F3:  $F(3,72)=2.724$ ,  $p<.05$ )。下位検定として Tukey の HSD を行なったところ, “学校生活と子どもの行動についての不安” で有意な差がみられた (Tukey  $q=11.125$ ,  $p<.05$ )。子どもの数が 4 人以上の群が 1 人の群に比べて, “学校生活と子どもの行動についての不安” が高いことが明らかになった。子どもの数が多いと, 一人一人の子どものことをみる余裕が

ない、あるいはそのように感じ、不安が高くなったのかもしれない。ただし、4人以上子供がいる群は全体の5.3%であったので、今後さらなる検討を要するといえる。

次に、子育て不安の信頼性をさらに検討するために、既に妥当性と信頼性をもつパーソナリティ検査 STAI 日本版との相関をみた。STAI 日本版については、中里と水口 (1982) が検討し、特性不安尺度についての信頼性は再検査法にて十分に高い数値が得られている。

検定の結果、子育て不安得点と特性不安得点において、正の相関がみられた ( $r=.485$ ,  $p<.01$ ) (Figure 1)。つまり、特性不安が高い人 (不安を感じやすい人) は子育て不安も高い (または、その逆) ということが明らかになった。



思春期の子どもをもつ母親が抱く子育て不安として、友達関係と子どもへの対応についての不安、夫と周りの人からのサポートについての不安、学校生活と子どもの行動についての不安という思春期特有の子育て不安があることが明らかとなった。今後は、不安得点の高い人に対し、どのような支援ができるかを考える必要がある。臨床心理学的には、さらに調査を続け、基準となる値を求めて、この尺度を面接時のスクリーニング検査として用いられるようにし、それを手がかりに面接を進めるというスクリーニングでの利用と、面接経過中の不安の程度の変化を確認することに利用できると考える。

本研究では中学校の一学年に質問紙を配布しているが、思春期は1年だけで終わるものではない。今回の項目の中には、学年が経るにつれて高まるのではないかと考えられる項目 (例えば「子どもは進学できるのだろうか」ということ)、など。進路選択が間近になるほど高まるのではないだろうか。) などがあると考えられることから、他の学年の子どもを育てる親でも調査を実施し、その不安の違いについて検討する必要がある。

現代社会は、家族形態が複雑多様化し、様々な保護者が存在し、そのばらつきはますます大きくなっている。両親が揃っている家族、母親あるいは父親だけの単親家族、祖父祖母が孫である子どもを育てている家族などである。また、両親が揃っている場合でも、母親あるいは父親が家庭にいる、いわゆる専業主婦の家族と両親とも仕事をしている共働き家族がある。直接子どもと接する時間もいろいろだろう。このような様々な保護者の子育て

不安尺度の開発は必要と思われる。

さらに、発達障害児など特別な支援を必要とする子どもを育てている保護者は、本研究で作成した子育て不安尺度とは異なる不安があると思われる。そのような保護者に対応した子育て不安尺度の作成も必要と思われる。

このように今後さらに、様々な人に対応できる尺度を作成し、どのような人が子育てにおいてどのようなことを不安を感じやすいか、または感じないかということをつまやかにし、子育て支援に役立てていきたい。思春期の子どもを育てる保護者と思春期の子ども自身の両方の不安について双方向的に研究をし、さらに思春期の子育て不安に関する知見を深める必要があるだろう。

付記：本研究は、2006年春に徳島大学大学院人間・自然環境研究科（臨床心理学専攻）に提出した修士論文の前半部分を、加筆・訂正したものである。調査にご協力くださったB中学校の関係者と生徒・保護者の皆様に、心から感謝申し上げたい。

## 引用・参考文献

- Coleman, J. C., Hendry, L. B. 1999 The nature of adolescence (Third edition). London: Routledge. (白井利明・若松養亮・杉村和美・小林亮・柏尾眞津子 訳 2003 「第5章 家族」 『青年期の本質』 ミネルヴァ書房, 90-120.)
- 加藤道代 2004 親離れ, 子離れ—親・家族 沼山博(編) トピックス 思春期・青年期と向き合う人のための心理学 中央法規, 146-148.
- 最上貴子 2005 第二次性徴と戸惑い—身体からのアプローチ— 臨床心理学「特集 11歳から15歳の心的世界」, 27, 318-323.
- 無籐隆・岡本祐子・大坪治彦 編 2004 やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズ よくわかる発達心理学 ミネルヴァ書房.
- 長坂典子 2002 家庭という“密室”での育児 大日向雅美(編) 特別企画育児不安 こころの科学, 103, 50-56.
- 中里克治・水口公信 1982 新しい不安尺度 STAI 日本版の作成 心身医学, 22, 108-112.
- 沼山博 2004 心理的離乳と第二次反抗期 沼山博(編) トピックス 思春期・青年期と向き合う人のための心理学 中央法規, 21-23.
- 小澤夏紀・富家直明 2004 心身の健康に及ぼすメディアの影響 沼山博(編) トピックス 思春期・青年期と向き合う人のための心理学 中央法規, 59-62.
- 榊原洋一 2002 小児科学の立場から 大日向雅美(編) 特別企画育児不安 こころの科学, 103, 29-35.
- 武内珠美 2004 子育ての楽しさ つらさ 無籐隆・岡本祐子・大坪治彦(編) やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズ よくわかる発達心理学 ミネルヴァ書房, 128-129.

(2006年10月6日受理)